



特 別  
~12  
5103  
1





V2  
5103

# 錄舍大草紙

## 序

古者有左右史記行與言辨善惡於一時無勸懲於百世矣是載籍之權輿歟本朝稱記錄者不為不多就中此記者尊氏未流之遺書而關東大家之舊記也君臣上下之儀說父子長幼之情有親疎有曲直讀者鑑事迹於既往而誠心術於當來者豈可失君臣之樞機哉



忍・城・文・庫

< 2007 - 120 >





永和六年 己卯三月三日改元 康平元年  
 所<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup> 皇極 國古 破<sup>レ</sup> 大<sup>ニ</sup> 始<sup>ス</sup> 矣 命<sup>ス</sup> 年<sup>ヲ</sup> 以<sup>テ</sup> 詔<sup>ス</sup> 曰<sup>ク</sup>  
 漢<sup>ノ</sup> 言<sup>ニ</sup> 云<sup>ク</sup> 河<sup>ノ</sup> 運<sup>シ</sup> 治<sup>ス</sup> 河<sup>ノ</sup> 由<sup>リ</sup> 也 此<sup>レ</sup> 西<sup>ノ</sup> 瑯<sup>ノ</sup> 也 此<sup>レ</sup> 在<sup>リ</sup> 河<sup>ノ</sup>  
 南<sup>ニ</sup> 關<sup>ノ</sup> 東<sup>ニ</sup> 一<sup>ノ</sup> 里<sup>ノ</sup> 以<sup>テ</sup> 此<sup>レ</sup> 河<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 管<sup>ノ</sup> 領<sup>ス</sup> 上<sup>ニ</sup> 於<sup>テ</sup> 漢<sup>ノ</sup> 春<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 舍<sup>ニ</sup>  
 元<sup>ノ</sup> 意<sup>ニ</sup> 方<sup>ニ</sup> 入<sup>リ</sup> 道<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 舍<sup>ニ</sup> 故<sup>ニ</sup> 大<sup>ニ</sup> 抄<sup>ス</sup> 之<sup>レ</sup> 入<sup>リ</sup> 也 除<sup>ス</sup> 濟<sup>ノ</sup> 水<sup>ノ</sup>  
 旅<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 治<sup>ス</sup> 也 出<sup>ス</sup> 瑯<sup>ノ</sup> 台<sup>ノ</sup> 洲<sup>ノ</sup> 時<sup>ニ</sup> 京<sup>ノ</sup> 都<sup>ノ</sup> 乃<sup>リ</sup> 備<sup>ス</sup> 關<sup>ノ</sup> 也  
 自<sup>レ</sup> 今<sup>ノ</sup> 以<sup>テ</sup> 内<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 勸<sup>ス</sup> 也 一<sup>ノ</sup> 人<sup>ノ</sup> 而<sup>シ</sup> 以<sup>テ</sup> 之<sup>レ</sup> 也 福<sup>ノ</sup> 念<sup>ノ</sup> 後  
 思<sup>フ</sup> 之<sup>レ</sup> 事<sup>ノ</sup> 亦<sup>リ</sup> 已<sup>ニ</sup> 矣 意<sup>ニ</sup> 表<sup>ス</sup> 之<sup>レ</sup> 治<sup>ス</sup> 神<sup>ノ</sup> 定<sup>ス</sup> 也  
 之<sup>レ</sup> 形<sup>ノ</sup> 也 又<sup>ニ</sup> 強<sup>ク</sup> 之<sup>レ</sup> 也 故<sup>ニ</sup> 其<sup>ノ</sup> 形<sup>ノ</sup> 也 以<sup>テ</sup> 下<sup>ニ</sup> 之<sup>レ</sup> 也 西<sup>ノ</sup> 河<sup>ノ</sup>  
 也 一<sup>ノ</sup> 思<sup>フ</sup> 之<sup>レ</sup> 事<sup>ノ</sup> 定<sup>ス</sup> 後<sup>ニ</sup> 其<sup>ノ</sup> 形<sup>ノ</sup> 也 以<sup>テ</sup> 下<sup>ニ</sup> 之<sup>レ</sup> 也 西<sup>ノ</sup> 河<sup>ノ</sup>  
 也 一<sup>ノ</sup> 思<sup>フ</sup> 之<sup>レ</sup> 事<sup>ノ</sup> 定<sup>ス</sup> 後<sup>ニ</sup> 其<sup>ノ</sup> 形<sup>ノ</sup> 也 以<sup>テ</sup> 下<sup>ニ</sup> 之<sup>レ</sup> 也 西<sup>ノ</sup> 河<sup>ノ</sup>



いさかゝりて我破山内へ破山内室と申す  
思ふもさうさうに足りたるに給ふらんやと云ふに  
女房に「おのぬかをうれと打棄しり。我男  
かゝり賢者なり人なり要らぬの事なり  
と云ふに「キテマヤト思ひ安んじ給ふに  
別嬪と切し夜をはなれりしり。と云ふに  
悪者うら笑母の物の子をうけりしり  
後又思ふに合給ふと云ふに「ハレ後ひり。氏備  
備へ心持教へりしり。と云ふに「ハレ我母之自筆の  
書金持佛堂へ入して別嬪切給ひり。法皇  
道徳と云ふに「ハレ福倉殿と云ふに「ハレ給ひ思ふに  
初に「ハレ公方軍の  
悔ひと云ふに「ハレ打立りり。と云ふに「ハレ入道  
道合と云ふに「ハレ後ひ思ふに「ハレ去二月十日  
と云ふに「ハレ後ひ思ふに「ハレ後ひ思ふに  
中と云ふに「ハレ板京都と云ふに「ハレ板京都の古板と  
没落して公方此思ふに「ハレ成行安ん思ふに  
長満津道と云ふに「ハレと云ふに「ハレ面見ん思ふに  
害の事と云ふに「ハレ風説ありと云ふに「ハレ後  
と云ふに「ハレ徳全の海と云ふに「ハレ對し思ふに



得たり自筆乃告人と書きて珍象守の  
古天和尙と使傳しして京都より経路氏  
初尚夏窓の末子よりして京公言此四宗敬  
の傳也和尙乃りこれやうも去事おれ京  
公方西地傳ありして同六月二日公方自筆の  
沙返よりより細事たりしは下り園出流  
お書流の思ふ紙ありり同日京公より新  
波活部と稱義將より後所職と云流部と云  
康暦二年 棟五月五日下野住人小山丸馬助  
為政吉我官方と号し送りし京公好字

うり為流

基綱と大將を向あして蒙原と云ふを  
及合我内十六日字紙云打園名より死  
しけり小山丸東流沙と知と云ふと云方  
と号し合我と云新陳部乃りしけり  
かきし謀叛れ最りしと云福金屋と  
し流退治ありし但京公乃流加部と  
稱しと云ふ後難ありしと云ふしと  
松通合しと云ふ梶原重頼と道隆  
使しと云康暦三年 上流しと別  
白穂一揆流加部合方と云流部と云







しゆん子紙以て孝を奉りしといふも城中流義  
海しゆくは望死に致志しふ所然といふも流  
中一助の去らるるに於て誓ひ書けりる所同い  
小山義政よりしり禅僧を使してて思身義  
大井より取て後一強兵に侍言ふ大井と  
流義より小山と相續侍候し流義と  
流義より大井と相續侍候し流義は  
流義より大井と相續侍候し流義は  
白雲より二百余人より流義の城より移り  
相又流義の城より移り流義の城より移り  
守り流義の城より移り流義の城より移り  
して大井より取て後一強兵に侍言ふ大井と  
す流義より大井と相續侍候し流義は  
捨使より流義より大井と相續侍候し流義は  
此おは小山田名といふ人曰くしり流義の  
流義の城より移り流義の城より移り  
竹中より取て後一強兵に侍言ふ大井と  
三月廿二日流義の城より自焼し流義の  
身より取て後一強兵に侍言ふ大井と  
白旗一擡矢白と白旗一擡矢白の取と名



入して先一書に揚り長中城を攻め  
上とくは多勢中下同十百有餘の城を攻  
落し四月十日に決まらば小山入道永  
時自害して先より別首と為り  
あり血陣へして五月丁未後村を  
徳倉へ沙波大沙堂へ沙波を三月廿  
清路へ入るるなり自ら死せり

正徳二丑年三月新田相列  
又上列武列と申す下河橋原  
代友使二人石捕新田長吉

并寺僧一人と云ふ松治部捕入道法松擲  
進り

至徳三年六月七日小山入大松北打出  
城に捕籠進めと押所寸高田守護人  
本寺の法理危不日と押所深江と陳と取  
若大元逆者又攻身合致し  
うの願定利の名へ退り  
月二日沙波向古河城と沙波在日十日若丸  
没落沙波と云ふ所へ沙波有るに  
國中通解し何事もなし







運心紙紀一南帝の勅命と号し沙陀を  
上二門を權一京師へ打てしより京師  
十二月沙陀兵に北帝擁衛より護衛を  
京師乃沙陀兵を河を以て明德三年二月  
河を依りて北帝道宿軍を沙門出ありり。  
又より去年十二月晦日山名氏法衣村を  
天下六年より屬しり北帝擁衛より京師二月  
廿一日松房列道合依り宿軍を以て  
子息靈定を代より補て年京師より陸奥  
おね支子に護衛を以て國を以てしと云下

是後事よりわたり北帝擁衛の先くは  
しりて去年の北帝擁衛よりしりてしりてしりて  
建しりり四月廿一日沙陀擁衛出運  
わり意永元年十月河道合依りて  
正月京師の沙陀擁衛三月廿一日  
義持公沙相擁衛より征夷將軍より備軍あり  
意永三年北帝擁衛より北帝擁衛より  
下りて去年の余意を以てしりて北帝擁衛より  
しりて北帝擁衛より北帝擁衛より北帝擁衛より  
しりて北帝擁衛より北帝擁衛より北帝擁衛より



奥列及任人田村庄自法包と頼むた新田  
義宗の息男新田相持と其後守刑部  
頼と頼とひそく大將と頼と白川と頼と打  
出取言と列武列と徳と頼と頼と子の頼  
頼と頼と頼集と田村庄自ハ征夷大將軍  
坂と田村丸陸奥守と下向の時頼と生  
地と子孫と一人頼と頼と頼と田村の名  
頼と頼と小島頼頼の時より頼と頼と  
頼と頼と下向自之乃頼と頼と頼と  
小山と頼と一頼と頼と頼と頼と頼と  
十ヶ頼と軍と頼と頼と一二月と頼と  
頼と六月頼と白川の城と下向法と頼と  
頼と頼と下向の頼と頼と新田と  
田村と頼と頼と頼と頼と頼と  
六月と頼と白川と頼と頼と七月と頼と  
頼と頼と頼と

の海に沈る



應永六年十一月甲子氏滿四十二歳之に  
逝去之去年之夏より精進と云ふ事あり  
沙彌經主と逆次の沙彌沙彌勤をり  
永安寺教と等人沙彌一次才利發正  
續院周德尚掛真系系周潘尚禎念  
西本菴僧海詔粟湯系文尚點系系系福寺  
文皇尚託念正續院周德尚点湯瑞泉寺  
中快詔初又小祥長系系奥列の滿貞系  
執行也陸執拈香不建長寺等系系等也  
若天滿系云後記位下在系系智以補任德念

敬又傳是治不四年女一發願上抄中務  
禪助取之河内政人二階堂野列入道法春  
一方以人長升掃初物入道之法禪律奉以  
町地佐濃寺入道淨長教新之寺以二階  
堂山成之也入道行康系也

應永六年春より陸奥出羽両國の邊境に  
徳久寺及び滿貞滿直二人山下向福村藤  
川支那より沙彌法以年一周防の人因助義  
弘系系系之送人之記一及合我是系系  
都之系系之物荒系以改道也之法人







大鞆よりして馳向ひ九月廿日伊達討負甲  
とぬき輝森氏去程又新田後反去永徳  
の比と信濃國大川原といふ處又ぬく  
隠してゐる。と云中出徳月十一日然るに  
新田一門浪合とて不ぬて皆討死して  
父子只二人うらゆりされ奥列へつけ  
下里定城の逆取酒造とて云ふは隠れ  
ひしつ小山美大を討てより奥列にも  
安堵を以相列と志北は以箱根山の奥  
と云余と云ふは相列を以ていふとの  
と云ふはかたれはひしつと云ふは  
しつと云ふは竹の下乃任人安田といふ  
志北はひしつと志永十年四月廿日新田  
相揮入道行路庵余山中より討死也  
子息刑部少輔を一子又云居合所より  
相列は以討死也其常とて安田は  
庵余は相列を以て上杉禪助の屬  
安藤と改名也

身氏を以討死也此由兄上杉長房入道  
房京四條合戦之時將軍此余より討



死あり甥也伊豆守を誅すと喜ぶるも  
惣領よりして強執るは言所也と事あり  
討せり其子憲房の室子と叔仲理危  
憲勝暦應元年より關東乃執權を被  
御旨同年三月十日信濃より討死其  
子幸松丸とて十四才二男幸若丸十二歳  
ありありと事等石川入道元道徳を  
孫倉と名りしは將軍大に感化を及左  
馬助胡房と号し信濃以後と名りり  
とは中勢也捕胡字と名り上総と名りり

りり應永二年三月宮内乃執事死仁丹大  
を乃先祖是也憲房は二男民部大輔憲  
顯山由は先祖是也此人ハ尊氏公と錦小  
路敏法兄弟不知の時錦小路殿の味方と  
ありしハ將軍法にのみありりれは事  
第一の人にして關東のわがけ人よあり  
たふふやと思召る事ハ被りおる事  
基氏公の山免の事よと知りりい  
て被りりり間事不総由とて執後  
安房兩守と被り下總倉の事後也とて山の



内教の先祖是也。此子孫代々為後代意  
永十年十一月十日。法王、國八幡三六の四波理  
出、あしし遷言あり奉終ハ上杉中務書補  
入道祥助也。同十六日。六月廿九日の夜、鎌倉  
法王、成堂之公方満兼ハ完戸を以ち、客不  
一法移あり。七月十三日。より法王、成堂の事  
始あり。八月廿七日。博とあり。十二月十八日。移  
後、忠を以ちし。上杉右馬侍氏、襲  
應永十七年。五月の比、より公方満兼、忠  
病氣、心その外、心より、身、祥、次、中、より、襲入

醫師、移、成、氏、を、し、し、集、り、秘、術、を、傳、ふ、  
陰陽、師、を、法、の、傳、習、所、を、い、ふ、ん、か、い、  
く、七月、廿、二、日、永、年、廿、二、日、  
勝光院殿、と、号、し、大、徳、乃、後、代、胡、字、入、道、  
祥、助、多、山、君、に、抱、う、し、  
と、事、後、思、ふ、を、あ、り、し、れ、  
我、家、に、あ、つ、た、は、後、代、  
長、柄、正、昭、就、寺、に、  
目、代、の、壇、衣、使、を、  
と、執、事、と、し、  
と、上、杉、右、馬、侍、氏、



河津等満急舟若天幸王後以元徳之  
帝之二階常後河吉お使京赴法  
一字をうと上陸れい新田原の橋縁  
謀叛と記し廻文とん便臣の軍を依  
催されりれい海々の侍取子望物急  
流く生捕りし七里と海を討て又  
満急れい舟満急り徳謀の全ありと  
徳金中し舟と流りれい若天幸舟上  
内之能く出ありと上杉安房も長基を色と  
舟持満急り陣謝ありと以て平定あり

寛永十八年六月廿九日清淨定始あり法  
取反意形の名出ありとて取不しと守  
公神の祭あり徳の早を死活致すあり  
十二月廿二日若天幸元徳ありとて持成し  
号は貞と度と七年の若ありと  
同十九年十月十日安房上杉安房入道  
大令死去は新年二十八歳号は光熙号  
同々大徳若天幸入道祥ありと安房と終

6



同女年三月六日申比瀆とある所は建立  
ありは行を正松澤秀也い島に松村朝云  
より代々公方の川再奥の所は松村と  
るく造るありてとて中し松澤  
と云四代より川建立自前よりなり。



